

自分と重ねて考えよう

～未来へ繋ぐハンセン病問題～

語り手 小牧 義美さん
山口 文夫さん

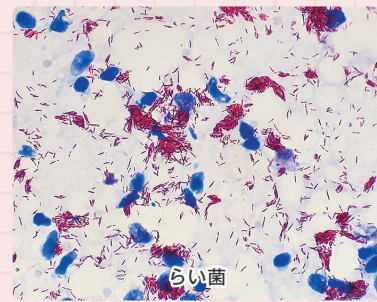
聞き手 時任 凜奈、永田 真子、古川 美月
鹿児島純心女子高等学校



ハンセン病問題について理解した方は心を寄せられる。
みんなにそうなって欲しい想いを込めて。

ハンセン病について

ハンセン病とは、「らい菌」という菌に感染することで稀に起こる病気です。主に、末梢神経が麻痺し、皮膚に様々な病的な変化が起きます。ハンセン病流行当時は、日本に有効な治療がありませんでしたが、アメリカで「プロミン」という治療薬が開発され、治癒された方も多くいらっしゃいます。ハンセン病は以前、「らい」や「らい病」と呼ばれていましたが、差別や偏見を生むものとして「ハンセン病」と改称されました。



ハンセン病問題について

強制隔離や子どもをつくらせないなど、間違ったハンセン病対策で患者や回復者、その家族の方々の人権が侵害されてきました。ハンセン病は完治する病気で、ハンセン病回復者や治療中の患者からも感染する可能性は皆無であるにも関わらず、国の間違った政策によって作り出された偏見差別は長く起こっており、今現在も続いています。



ハンセン病回復者の小牧義美さん

ハンセン病患者に対する差別や偏見に 追い詰められた日々

昭和5年に兵庫県で生まれ、6歳の時に宮崎に移住。16歳の時にハンセン病と診断され、鹿児島県の星塚敬愛園に入所。列車の移動の際、足や顔が変形した人を見て、自分も治療しなければならないことに気づき、世の中から差別を受けるような気がした。入所後、青年寮に移され、当時はとにかくお腹が空いて、夜も寝られないほどになっていた。ある晩、隣の部屋の人が心配して芋をくれたことがあり、生涯忘れない思い出となった。

また、自分に合う仕事がしたくて木工部に入った。しかしその仕事はとても大変で、配給部へ仕事を変え、治療を続けた。昭和26年、環境を変えようと長島愛生園に転園。そこでは何もかもが新しく見え、嬉しくなった。

非常に楽しい日々を送っていたが、突然「馬鹿者」と言われたような気がした。しかし、周りには誰もいず、誰か

からの戒めかと思い、それからはあまりはしゃげなくなった。23歳の時、手の感覚がなくなり、生活は荒れていった。そして、愛生園を出ることになった。

星塚敬愛園に帰ってきてからはパチンコを覚え、自動車免許もとった。昭和50年からは監督委員をしたり、食糧部で働いたり、休みをもらって遊んだりという日々が続いた。72歳の頃に中国ツアーがあることを聞き、中国のハンセン病村を訪れることにした。しかし、その環境はひどく、介護する人もいない。「なんとかして村の人たちの役に立ちたい」と思い、医療指導を行った。94歳になった今、スタッフの方々と冗談を言いながら話し、楽しく充実した日々を送っている。

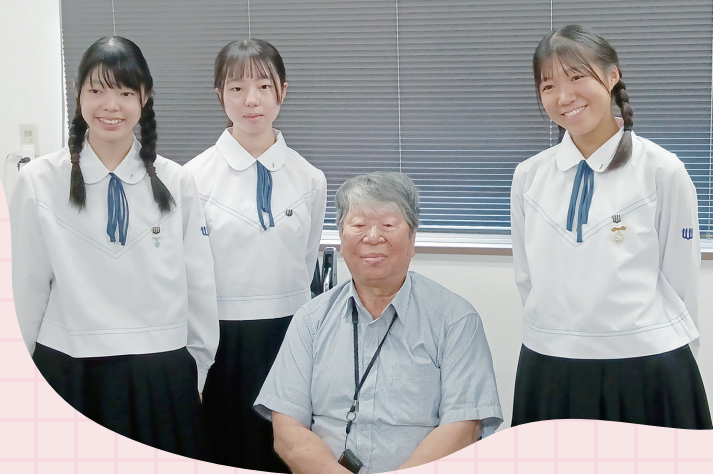
苦しくても「生きたい」という一心で

ハンセン病になると手足が変形し、世間から不気味がられ、差別を受けてきた。療養所では偽名を使い、家族までもが差別を受けないようにしていた。今でも苦しい思いをしてるハンセン病患者・回復者や、ハンセン病への偏見がまだ根付いている人はたくさんいる。ハンセン病問題について学んだ私たちにとって、これはとても心苦しい事実。ハンセン病患者・回復者は今まで、ひどい扱いをされ、**苦しくて死にたいと思った人も中にはいる。それでも「生きたい」という一心で、強く、人間らしく生きようとする姿がどれだけ美しいか、理解してほしい。**



会長 山口文夫さん

この施設の自治会会長及び副会長を15年ほど務めています。山口文夫といいます。75歳です。現在、星塚敬愛園には53名の入所者がいます。入所者が安心して暮らせる環境を守るために、これからも頑張りたいと思います。



人生を豊かにする4つの力

社会に出てから、私たちハンセン病患者・回復者は差別や偏見を受けました。この経験から、社会の人々にハンセン病問題について正しく理解してもらうことの大切さを痛感しました。そして、自分たちも社会についてもっと学ぶ必要があると感じました。その後も私たちは差別や偏見と闘い続けなければなりません。しかし、私たちは決して諦めずに、自分たちの力で道を切り開いていきました。**誰でも持っておくべき力として、私は「4つの力」を提唱しています。**

それは、『**将来を見通す力**』、『**先を読む力**』、『**説得する力**』、『**まとめる力**』です。これらの力を身につけることで、私たちはより豊かな人生を送ることができるでしょう。そして、将来の目標に向かって、一歩ずつ着実に進んでいくことができるはずです。

4つの力



言葉を通してより良い社会を築く

ハンセン病問題について若い世代にどう伝えるか、悩んでいます。ハンセン病問題の歴史を若い世代に知ってほしい、理解してほしいと思っています。差別や偏見をなくするために**自分の中に引き出しを持ち、たくさんの言葉を蓄えることが重要**です。言葉遣いを大切にすることは、人とのコミュニケーションを円滑にしお互いを尊重し合う第一歩です。また、大人世代の理解も必要だと考えています。

辛い歴史を繰り返さない

皆さんにお伝えしたいのは、私たちが生きてきた過去を知り、私たちの存在があったからこそ、今の社会があるということです。今を生きるみなさんが言葉や行動を通じて偏見をなくし、未来を担う世代と共に理解を深めていただけることを、心から願っています。



ハンセン病問題を学んで



時任 凜奈

今回の活動を通して、日々の生活を過ごしていくなかで大切なことを多く教えていただいたので、学びを生かし、過去を無駄にせず、偏見のない世の中を作るために少しでも貢献したいです。



永田 真子

差別や偏見は簡単には無くなりませんが、苦しんでこられた方々の声を聞き、思いを伝えるために「今回の活動」を通して、ハンセン病問題の理解を深めていただきたいと思います。



古川 美月

ハンセン病問題を学ぶことで、強く生きることの大切さや、差別がどれだけ人を苦しめるかを理解することができました。もっと多くの人にも正しい知識が身につくように伝えていきたいです。

未来へ繋げるために

「ハンセン病問題は昔の出来事。今はもう治る病気だし自分には関係ない。」と、そんな風に思っている人が大半だと思います。実際私たちもはじめはハンセン病問題についてそんなに詳しく知らなかったし、このような機会がなければ知ろうとしなかったと思います。しかし、今回小牧さんや山口さんのお話を聞いていくうちに、ハンセン病問題は今もなお続いている日本にとってとても大切なものなのだと気づきました。

人間は誰だって過ちを犯すものです。人を傷つけたり、自分と違うものを差別したりしてしまう。しかしそれは、**1人1人の考え方を少し変えるだけで防ぐことができます**。自分や周りとは違うものを勝手に心の中で線引きせず、広い心と視野をもって過ごすと、おのずと多様な社会は出来上がっていく。また、過ちを犯してしまったとしても、それに気づき改善していくことはできます。日本で過去に起きてしまったハンセン病回復者の方々に対する差別や偏見。この過去の過ちを「かこのもの」として知るだけでなく、しっかりと理解してこれからの日本の未来を築いていくこと。これが私達に今できる最善の行動だと考えています。



**私たちは学んだだけで終わらず、
未来へ繋げるために行動していきます。**